

コーポレートカルチャー論B		准教授 八木 孝幸	
科目カテゴリー	国際ビジネスコースの専門 選択科目、会計ファイナン スコースの専門選択科目 教職科目	科目ナンバリング	23220208 25320226

1. 授業のねらい・概要

企業に参加・構成する人々は、それぞれがそれぞれの感情や考え方を持った、生きている人間なのである。そういう人間が集まって形成される企業について研究しようという場合、単にハード的側面ばかりを追うだけでなく、企業の「ソフトな側面」についても充分研究する必要がある。

人が集い、集団を形成するところには、必ず「カルチャー」が芽生えてくる。どの企業にも、「コーポレートカルチャー」というものは必ず存在している。人間と同様に、企業にも個性がある。企業の個性ともいうべきもの、それが「コーポレートカルチャー」なのである。この講義はそんな企業の「ソフトな側面」すなわち「コーポレートカルチャー」にスポットを当て、研究して行こうというものである。

講義内容の詳細については「授業計画」の項にゆずるが、後期は主にコーポレートカルチャーの「構造」と「機能」について講義を行う予定である。

2. 授業の進め方

テキストは用いず、板書を中心に講義を行う予定である。資料の配布は適宜行う。

3. 授業計画

1. 個人の態度とコーポレートカルチャー	9. 行動規範共有の意義
2. 経営者の役割と経営理念	10. 価値観生成・浸透のための効果的要因
3. 組織に価値観が必要な理由	11. パラダイム生成・共有化のための効果的要因
4. 共有された思考様式としてのパラダイム	12. 行動規範の共有化のための効果的要因
5. 具体的行動指針としての行動規範	13. コーポレートカルチャーの機能不全、その原因
6. 「共有」の意味	14. コーポレートカルチャーの逆機能とパラドックス
7. 価値観の共有の意義	15. 本講義の総まとめ
8. パラダイム共有の意義	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

講義計画を参考に、次回講義までに参考文献などを読んで2時間以上の予習をしておくことが望ましい。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施（あるいはレポート提出）の後、解答などを掲示板に掲示する。

6. 授業における学修の到達目標

企業の「見えざる構造」であるコーポレートカルチャーについて理解を深めた上で、議論が行えるようになることを目標としている。

7. 成績評価の方法・基準

定期試験の結果（50%）及び授業への取り組み姿勢（50%）によって評価する。ただし、定期試験の結果が授業への取り組み姿勢の評価のいずれかが59点以下になった場合は、不可とする。

8. テキスト・参考文献

〈参考文献〉

- (1) 伊丹敬之・加護野忠男『ゼミナール経営学入門（第3版）』日本経済新聞社、2003年。

(2) 河野豊弘『変革の企業文化』講談社, 1998年。

9. 受講上の留意事項

本講義の履修に関して特に制限はないが、『経営学基礎』の単位が取得済みであることが望ましい。なお、座席表作成の都合上、履修希望者は初回より必ず出席のこと。